

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ボランティア活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 中牧, 弘允, 安田, 純子, 青柳, 千子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/1416">http://hdl.handle.net/10502/1416</a>

## 第4章 ボランティア活動

中牧 弘 允

国立民族学博物館先端民族学研究部

安田 純 子

国立民族学博物館研究支援推進員

青柳 千 子

国立民族学博物館研究支援推進員

はじめに

### 1. 民博におけるボランティア活動の概要

- 1) 特別展「大モンゴル展」
- 2) 特別展「越境する民族文化—いきかう人びと、まじわる文化」
- 3) 特別展「進化する映像—影絵からマルチメディアへの民族学」
- 4) 企画展「大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」
- 5) 特別展「ラッコとガラス玉—北太平洋の先住民交易」
- 6) 冬休みイベント
- 7) 全米日系人博物館巡回展「弁当からミックスプレートへ」

### 2. 「弁当展」におけるボランティア活動

- 1) 募集ならびに追加募集とレクチャー

### 3. ボランティアの活動

- 1) 活動内容
- 2) 活動期間と体制
- 3) 懇談会の実施と館内見学会

### 4. 展望

はじめに

国立民族学博物館がボランティア活動に取り組むようになったのは1998年の特別展「大モンゴル展」からである。以来、館内スタッフを中心に試行錯誤の対応をはかってきた。館内におけるボランティアの対応窓口は情報企画課の研究支援推進員であり、安田純子は当初から、青柳千子は1999年からかかわってきている。「弁当展」ではボラ

ンティア活動の発展をはかるべく、全米日系人博物館の三木美裕教育部長の指導下でさまざまな企画に取り組んだ。「弁当展」におけるボランティア活動は学習プログラムと表裏一体の関係にあったが、ここでは民博におけるこれまでのボランティア活動をふりかえりながら、「弁当展」における活動の軌跡を報告したい。ただし、今後の方向性については最後に多少言及するにとどめたい。なお、1節は安田、2-4節は青柳が担当して執筆した。(中牧弘允)

## 1. 民博におけるボランティア活動の概要

民博におけるボランティア活動は特別展・企画展のみであって、「弁当展」ではじめてそれ以外の展示でのボランティア活動となった。これまでの活動の概略は以下のとおりであり、ボランティアの募集・研修・待遇などの詳細については、表1を参照していただきたい。

### 1) 特別展「大モンゴル展」

民博のボランティア活動は「大モンゴル展」の実行委員長小長谷有紀助教授の提案に端を発している。ボランティアには博物館への来館者と展示を結ぶ架け橋となる役割が期待された。そこではデールを身にまとい、シャガーを使って遊んだり、馬頭琴の弾き方を教えたり、試着室では衣装の更衣を手伝ってもらった。展示を説明するというより、一緒に遊んだりしながら、むしろ来館者の話の聞き役としての役割が主であった。募集にあたっては実行委員長の個人的紹介による方法とともに、インターネットによる方法も採用した。はじめての経験にしてはさしたる問題もなくスムーズにおこなわれたと思われる。

### 2) 特別展「越境する民族文化—いきかう人びと、まじわる文化」

この特別展ではモンゴル展での活動を発展させた形で、展示物であるカレンダーの解説、親指ピアノの弾き方の指導、アポリジナルの文字や絵の解説、イベントやワークシートの補助説明などであった。土日・祝日だけの活動であったので、平日は学校や団体への対応として、民博の研究支援推進員が展示コーナーごとにギャラリートークをおこなった。中牧教授がボランティア活動に直接関与するようになったのは、実行委員長をつとめたこの展示からである。

### 3) 特別展「進化する映像—影絵からマルチメディアへの民族学」

この特別展では、本物と同じように作られたレプリカを使って、ものの使い方を説明するとともに、ワークショップでの指導や材料作りをしてもらった。ボランティアがみずから図書館で見つけた資料を提示したりして、積極的に勉強する姿が目立つようになってきたのもこの頃からである。

#### 4) 企画展「大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」

体験コーナーで、天秤棒をかつぐ、あしなかを履く、麻糸をつくるということの補助をもらった。今ではあまり見られなくなったものを通してさまざまな世代間の交流の糸口となり得たと思われる。

#### 5) 特別展「ラッコとガラス玉—北太平洋の先住民交易」

展示場での解説とラッコづくりのワークショップ、さらにイベントでの補助などを担当している。来館者の年齢にあわせたさまざまな解説をそれぞれのボランティアが工夫し考える活動となっている。

#### 6) 冬休みイベント

冬休みイベントでは、特別展・企画展の活動とは違って、いろいろなボランティアの形態がこころみられた。2001年には帽子づくりのワークショップの手伝いを通して来館者とともに思い思いの帽子を一緒に作り出すという活動がおこなわれた。民族学者のフィールドワークを体験する活動では、野林厚志助手の企画によって作られたパスポートを使って、考える・観察する・記録するというフィールドワークの体験学習の補助をおこなった。ミニコンサートでは、小長谷有紀助教授の紹介つきでシンバヤル氏による馬頭琴の演奏、ならびに職員有志のボランティアによるガムラン、クリンタンの演奏がなされた。正月行事に参加した恵那市のボランティアは、民博という場を借りて餅つきイベントをおこない、来館者におもちを振る舞った。これは外部団体によるはじめてのボランティア活動であった。

#### 7) 全米日系人博物館巡回展「弁当からミックスプレートへ」

他館のプログラムや学習キットを用いる、はじめてのボランティア活動となった。全米日系人博物館より三木美裕氏が来館し、企画の準備段階から参加して、多くの資料を紹介するとともに、子ども相手の学習キットを使って展示だけでなく実際に触ったり着たりして楽しむ方法が示された。展示物をただ単に見せるだけでなく、キットとボランティアを介していかにより豊かに展示世界を表現することができるのかを目の当たりにした経験とあった。また、三木氏との話し合いの中でボランティアの意識改革もおこなわれ、より積極的な参加、活動をのぞむ方向性が生まれてきたように思われる。その詳細については次の節にゆずりたい。(安田純子)

## 2. 「弁当展」におけるボランティア活動

### 1) 募集ならびに追加募集とレクチャー

この展示では、充実した教育プログラムをより効果的に実行するため、立ち上げの当初よりボランティアの活動が期待されていた。まず、3月23日の実行委員会で、活動の条件(往復の交通費と昼食券を支給)、1日の人数配分(当面は3人)などを協議し、これまで当館でボランティア活動の経験がある人を対象に募集をかけることにした。

3月30日付けで安田の作成した名簿に登録されている約90名に対し、三木氏によるレクチャーへの案内を含むボランティア募集案内を発送し、30数名からレクチャーおよび活動参加の回答があり、4月17日(火)と21日(土)にほぼ同じ内容でのレクチャーを実施した。レクチャーの内容は以下の通りである。

- ・中牧・三木両氏の挨拶、ならびに展示担当者であるアーノルド・ヒウラ氏の紹介
- ・アーノルド・ヒウラ氏による展示の解説
- ・三木氏の指導による学習キットの実践

今回は三木氏の意向で、希望者にはボランティア活動への参加・不参加にかかわらずレクチャーの受講をすすめた。レクチャーを受けた後で活動参加の意思表示をした人は8人である。こうして当初より参加の意志を示していた22人とあわせ合計30名のスタッフで巡回展のボランティア活動が実施されることになった。(企画展「アチック・ミュージアム」終了後に参加すると回答した2人は6月7日以降に加わった。)

しかし30名中28名が3月15日より開催されている企画展でのボランティアと兼務していたために、各人の活動日数が増えてローテーションが巧く組めない可能性があった。そこで開催の1週間目(4月25日)に開かれた実行委員会で、ボランティアの追加募集を決定した。翌日から、みんぱくホームページにボランティア募集の旨を掲載するとともに(5/15まで)、『月刊みんぱく』5月号の送付に際してみんぱく友の会の近隣居住者およそ1300名にボランティア募集要項を同封した結果、応募者12名を得た。追加募集者のためのレクチャーは5月27日(日)1回のみで、三木氏は既にアメリカに帰国していたので中牧と青柳がそれぞれ展示解説とキットの実践を担当した。

ボランティアに対するレクチャー時には以下の資料が配布された。

- a. 全米日系人博物館巡回展〈弁当からミックスプレートへ〉ボランティアの手引き
- b. 『日系アメリカ人の歴史—アメリカに渡った日系移民の歩み』全米日系人博物館、2001
- c. 「第1部 弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」(沖縄で開催されたときの図録『日系移民1世紀展』[沖縄県立博物館、2000]の抜粋)
- d. 柳田利夫編著『アメリカの日系人 —都市・社会・生活—』(抜粋) 同文舘、1995

e. 北村崇郎『一世としてアメリカに生きて』(抜粋) 草思社、1992

ボランティアの諸氏は従来にはない配布資料の多さに最初はおどろいたようだが、三木氏の「興味のあるところを拾い読みしてもらえばよい」という言葉に胸をなでおろしていた。そして、その豊富な資料ゆえに展示がより良く理解できた、と後から評判となった。

### 3. ボランティアの活動

#### 1) 活動内容

今回の展示は全米日系人博物館が用意した学習キットを使って来館者(特に子どもたち)と接する新しい取り組みがなされた。スタッフたちは数種類のキットを活用して来館者がよりよく展示を理解するよう、積極的な活動をくりひろげた。以下、項目を分けてその内容を紹介する。

##### a. 来館者への声かけ

この巡回展がハワイに住む日系人の歴史の展示であること、弁当とミックスプレートの関係などを簡単に紹介した。展示場の入り口で声をかけることで、従来の民博とはひと味違った展示の内容に興味・関心をもつ来館者が多かった。

##### b. 学習キットの活用

全米日系人博物館側はこの展示に関して、子供が楽しめる仕掛けをいろいろ用意していた。それを活用して展示をより身近に感じてくれるよう、来館者に働きかけた。

##### ・紙芝居の実演：

日本人移民の暮らしぶりをわかりやすく紹介したもので、展示の理解を促した。紙芝居のト書きにボランティア・スタッフのアドリブが加わり、より丁寧な展示解説となっていた。小学生だけでなく大学生や大人も熱心に見ており、家族連れやグループでは、その中の誰かが紙芝居を読む光景も見られ、来館者自身が楽しんで展示に関わっている様子がうかがえた。

##### ・宝探しゲーム：

ボラ・フィルムに写った展示物を探してもらい、それが何か、どの場所にあった物かを説明してもらう。この時、年齢層に応じてその展示物の来歴などを説明するプログラムだった。一つの物を探すために展示物をしっかり見ること、資料の説明をすることで、その展示物に対する印象と理解を深める効果が期待された。このプログラムはとくに小学生に人気があった。

##### ・サトウキビ畑でのファッション

サトウキビ畑での労働着を実際に着ることで、その暑さ・しんどさを実感してもらうことがねらいであった。着付けをしながら、なぜこのような重装備をしなければならぬか等を説明した。スタッフが衣装を着てモデルになることもあり、好評であった。実際に全部着てみてその暑さを実感し、感動する人が多かった。手甲、脚絆など部分だけを着用する人もいた。

### ・ハワイの言葉クイズ

「テリヤキ」「チャウメン」など、現在ハワイで日常使われている言葉の意味・起源についてカードを使って紹介するもの。多文化社会ハワイを言葉の面から実感してもらうことを目的としていた。これを紙芝居と組み合わせて使い、効果をあげるボランティアもいた。

#### ・ハワイのスーパーで現在売られている商品の解説

スーパーの商品が、複合文化社会ハワイを象徴していることをふまえ、韓国・中国・日本起源の食材などを紹介した。

#### ・ガレージの中にある「日本の生活」探し

ガレージ展示のスケッチ(説明あり)を参考に、共通しているものを見つけだし、用紙に記入してもらう。

#### c. 展示に即した解説

各ボランティアの力量に応じてハワイへの移民、日系人社会の状況、移民開始初期の状況などについて興味のある来館者に解説した。実際にハワイに住んでいたという来館者が自分の体験を語ってくれ、対話がはずむこともしばしばあった。

## 2) 活動期間と体制

巡回展の開催期間はボランティア活動の面から見れば3期に分けられる。第1期は4月18日から6月5日まで。学校の遠足シーズンで、午前中は団体客が嵐のように押し寄せる時期である。ボランティアは用意された学習キットを使ってさまざまな工夫を凝らしながら、団体客としてやってくる子どもたちに対応していた。30名のボランティアのうち28名が企画展(アチック・ミュージアム展)と兼務していたためにローテーションのまわりが早く、活動回数が多かった人は2週間ほどで軌道に乗ってきたようである。

第2期は6月7日から7月19日で、春の遠足シーズンがそろそろ一段落ついて、平日の来館者が少なくなる時期。企画展が終わり、新メンバーも加わって44人でローテーションを組んだ。ゆっくりと落ち着いて展示を見る人への対応が十分できるようになった。学校と連携したプログラムが実施されたのはこの時期で、4月以降からかわってきたボランティア・スタッフが活躍した。

第3期は7月20日から最終日の8月28日まで。夏休みのミニワークショップ「みんなくみックスプレートひろば」がはじまり、1日4人体制で活動した。夏休みになって、親子連れが多く来館した。土日は博物館実習の大学生(2~3人)が中心となってワークショップを運営していたが、平日はボランティアのみで対応した。ワークショップは小さい子供を連れた家族に人気があって忙しく、こちらに人手がいて紙芝居や試着まで手がまわらないこともあった。なお、第1期と第2期は1日3人、第3期は夏休みのミニワークショップに対応するため、1日4人の体制で臨んだ。

## 3) 懇談会の実施と館内見学会

開催から約1ヵ月が過ぎた5月末、1ヵ月後にボランティア懇談会を催すことが決ま

った。

この展示会は1日3人体制でローテーションを組み、日々対応してもらったが、ボランティア・スタッフが一同に会する機会はほとんどなく、互いの情報交換は日誌に頼るのみであった。6月から新たに13人のスタッフが加わるようになったが、ローテーションの中で出会う人は限られていた。そこで、直接来館者に接しているボランティアの生の声を館側がしっかりと聞く機会を作るべきという隅田\*\*情報企画課長の提案もあり、実行委員長の中牧教授を交えた懇談会を開き、互いの意見交換をおこない、かつ館側への忌憚なき意見を出してもらうことにした。

なるべく多くの人に参加してもらうために、懇談会の日を1ヵ月以上先の日曜日(7月1日)と決めて早くから予告し、詳細はその1週間前に知らせた。前々からの知らせが功を奏してか、当日は予想を上回る人数(約30名)の参加があり、館側は中牧、隅田、宇治谷、安田、山村、青柳(敬称略)の6名が出席した。

会は1部と2部に分けて実施した。3時30分から始まった第1部では、まずは一通り自己紹介をし、その後それぞれが民博での活動をどのように考えているかを述べあった。初対面の人も多く、最初は少し硬い雰囲気であったが、第2部は(アルコールも入り)すっかりうち解け、さまざまな意見がだされ議論が沸騰していった。この時に出席された意見や提案を以下に記す。

#### ☆活動についての思い

- 活動を通じて、今まで何の興味もなかったことに関心をもち、自分自身が勉強になる。
- 何らかの形で社会に貢献しているという自負心もてる。
- 他のボランティアやお客さんに教えてもらうことが多い
- 民博はボランティアの敷居が低いので、特別な知識が無くとも活動に参加でき、活動していくうちに知識を得ることができる。
- 活動をすることで、今まで関心がなかったことにも興味もてるようになる。
- あまり難しいことを考えずに、自分自身が楽しんでボランティア活動をしている。

#### ☆意見、提案

- 会期中にボランティアと実行委員の先生との懇談会を開いてほしい。
- 年間スケジュールをきちんと組んで、ボランティアのための学習会や見学会を開いてほしい。
- 他の博物館のボランティア活動も知りたい。
- 土・日・祝日にこそ館の者がいるべきではないか。

翌7月2日、前日の懇親会を受けてボランティア・スタッフの要望などをいかに受けとめていくかを中牧、隅田、宇治谷、安田、吉荒、青柳で協議し、今後の課題は山積しているが、さしあたって今すぐできることは何かを考えた。その結果、図書室の利用を可能にすること、ボランティア研修の一環として収蔵庫、図書館などの見学会を催すことにした。

見学会は7月19日(火)と8月24日(金)の両日、民博制作のPR映画「集める」のビデオ観賞、収蔵庫案内、画像データ処理施設の見学、書庫の見学と利用についての概

要説明という、ほぼ同じ内容で実施した。計40名近くが参加し、おおむね好評であった。(青柳千子)

#### 4. 展望

民博が特展・企画展にボランティア・スタッフを導入してから既に3年、登録者は100人に近い。彼ら(彼女ら)は展示場に常時いることで、さまざまな効用を与えてくれている。展示に関する細やかな提言、たとえばキャプションの間違いの指摘、漢字のルビを打つ提案、照明が暗い等、館側が気づかない点を指摘してくれるだけではない。来館者の質問に答える、来館者から展示に関する新たな情報を得る、来館者が自分の体験を語っていくなど、人がそこにいるからこそ可能な活動が生まれ、展示に暖かみが加わっている。

また、「遠足で来た子は風のように立ち去る」「ワイワイガヤガヤ走り回っているが、意外にきちんと見ている子がいる」「コーナーの説明を読む人が少ない」「学生がレポート作成の為に熱心に見学」「目に涙していた」「ゆっくり座ってビデオを見ている」など、来館者の様子をつぶさに観察し、それを館側にリアルに伝えてくれる。先に記した意見や提言にもあるように、これまでの活動や民博の対応に飽きたらず、もっと多様な活動を望んでいるスタッフもいる。また、来館者側もボランティアの存在に期待をもっている。今や、このボランティア・スタッフを抜きにして民博の博物館活動を考えることはできないであろう。

先に述べた7月の懇談会の後、7月の博物館運営委員会で中牧教授がボランティア・ワーキングの立ち上げを提言、10月にそのワーキングが発足した。これまで未整理であった館側のボランティア活動に対する考えや姿勢をこのワーキングで確立し、民博のボランティア活動をさらに発展させていくことが望まれている。(青柳千子)